シナプスの入江

THE BIGHT OF SYNAPSE

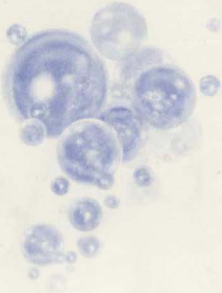
YOSHINORI★SHIMIZU

清水義範

シナプスの入江

YOSHINORI★SHIMIZU

清水義範



福武書店

清水義範（しみず　よしのり）
一九四七年、愛知県に生まれる。愛知教育大学卒業。一九八八年、『国語入試問題必勝法』で第九回吉川英治文学新人賞受賞。『蕎麦ときしめん』『永遠のジャック&ベティ』『ことばの国』『単位物語』など著書多数。

シナプスの入江

一九九三年五月一〇日　第一刷印刷
一九九三年五月一五日　第一刷発行

著者　清水義範
発行者　福武總一郎
発行所　㈱福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話(〇三)三二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七
本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

©Y.Shimizu 1993
Printed in Japan

ISBN4-8288-2451-0 C0093
NDC913 196 232p

シナプスの入江

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

腹立たしいまでに執拗な、部分的に細密画のように克明な記憶があった。
それまでの思考とは脈絡なく、ふいにそのことをありありと思い出して微かに苦いような気分になることが、草薙卓雄（くさなぎたくお）にはあった。
思い出は、現象への記憶と、その時の自分の気分への記憶で構成されている。
推定するにそれは彼が三歳ぐらいの時の体験であり、三十五年も前のことだった。
同じ形のドアが等間隔にいくつも並んだ、バラックのような長屋風の建物がある。平屋で、二階はなかった。それがどこにあるどういう建物なのかは全く覚えていない。
ただ、そこで味わった気分の干渉を受けて、光景はどことなく残酷な顔つきをしている。

建物を構成する板切れは干からびたように白っぽい。そしていくつもある同じ形のドアだけが、洞窟の入口ででもあるかのように濃い茶色で、ぬめりとした肌合いを有していた。

地面が白く乾いていた。踏み固められた、妥協点のない地面だった。

橙色の、猥雑な花の記憶がある。建物の前に、それだけが飾りとして植えられていた。あの乾ききった堅い地面に。だから花は荒々しく暴力的でさえあった。

今の知識が、草雑にその花を金盞花ではないかと思わせる。だとすればあれは春のことだということになる。

だがその時の三歳の彼には、花の名前はなく季節もない。あるのはいわれのない悪意である。

その建物から少し離れて白い地面の庭を挟む形に、便所があったのだ。そのことは確かである。だがその便所の外観はない。

古い農家などにあるような別棟の小さな便所なのだろうという気はする。建物の住人が共同使用するためのものだ。汚くて、臭かったと思う。木製のサンダルなどをはいて使用する形式だった。

でもそれは、後から説明のためにつけ加えられた情報なのかもしれない。便所の存在は、そこにそれがあったという、事情への記憶でしかない。

三歳の彼は、母のいるところへ戻ろうと思っている。その気持は、まぎれのない事実だった。

そして、ひとつのドアを叩いているところに記憶は飛ぶ。自分の体がどんどん小さくなっていくような心細さを抱いて。

後の説明係が、その間のいきさつを推定する。

母につれられて、初めてその建物に来たのであろう。その中の一室に、母の知りあいがいて、そこを訪問したのだというような気がする。

そして、三歳の彼はおしっこがしたくなり、便所を使ったのだ。そのあと、母のいるもとの部屋に戻ろうとしている。

確かこの部屋だったと、悪意を秘めて無表情でいるひとつのドアの前に立つ。だが、取りつけの悪い真鍮色のドアノブをまわして引いてみてもドアは開かない。馴染みのない世界に対して彼はふと不安を抱く。

だが、それは説明だ。

記憶にあるのは、お母さん、お母さん、と声を出しながらそのドアを叩いている情景。そして、旅先で親にはぐれた子供のような、心細い気分。

かなり長い間そういう状態が続いたような気がする。三歳の彼はほとんどパニックに陥って

いた。

ドアが開かれた。中から顔を出したのは、知らないおばさんだった。

そのおばさんの表情が忘れられない。そこまで思い出すと今でも彼は、胸の中を泥で汚れた棒でかきまわされるような気分を味わう。

ずるりとだらしない、それまで彼が知らなかった種類の表情を、その女性はしていた。ひどく髪が乱れているのが印象的だった。

女性は彼を、いやな虫を見るような顔をして見た。腹立ちと不審とが混じった顔で。

そして、圧倒的な軽蔑の目。

その軽蔑を、三歳の彼は全面的に受けとめた。自分が間違いをおかしたことを瞬時に悟った。そして、全身がカッと熱くなるような恥の感覚に薙ぎ倒されそうになった。

恥の思いは、息もつげぬほどに巨大だった。

だから、何十年たっても忘れられないほどに強く刻印されてしまったのだ。いつまでたっても、その時の気分を思い出すことができる。

おそらく、三歳の彼はそこで何か、状況をとりつくろうための発言をしたのだろう。ぼくのお母さんはいませんか、とか、部屋を間違えました、というような意味のことを。そうしなければ自分が消えてしまいそうだったから。

だが、そこはもう記憶の中にはない。後からした推測である。
そして、そうこうしているうちに、どうも外でややこしいことが起きているようだと察した母が、本来その中にいた部屋のドアを開けて出てきたのだろう。おそらく事態はそんなふうに収拾されたはずだ。
だが、草薙卓雄の記憶はそこまではない。
ドアを開いて出てきたおばさんの顔、いや顔というよりも、軽蔑の気配が巨大なものとしてある。そして自分の、恥の概念。いたたまれない居心地の悪さ。そればかりが圧倒的な強さで克明に残っているのだ。
どうしてそんなことを、こんなに強く覚えているのだろうと大人になった彼は不思議に思う。どこか、まともではない感情に襲われているのだ。
あのおばさんが、なんとなく異常だった。
おばさん、というのは三歳の彼から見た表現であり、今にして思えばそれほど年を取っているわけでもない既婚女性である。その人の様子が、どこか変だったような気がする。子供が見たことのないようなだらしなさが漂っていた。そして、子供が見たことのないような憎悪が。
だからこそ、痛々しいまでに敏感に感応してしまったのではないだろうか。
ごく最近になって、その時のことを彼はそこまで分析するようになっていた。

あの女性は、服装もまともではなかったのではないか。シュミーズ一枚というような、人前に出られない格好をしていたのでは。だからまず、その雰囲気に異常を察知して怯えたのではないだろうか。

創作であるかもしれない。だが一方で、間違いなくそういうことだったという気もする。

あの女性は、昼中の性交をしていたのではないだろうかと今の彼は想像する。そうだとすれば、子供を怯えさせるようなだらしのなさにも、憎悪や軽蔑にも、説明がつくような気がするのだ。三歳の自分が受けとめた恥の思いは、そのあたりから来ているものではないだろうか。

もちろん今となっては、確かめようもないことなのだが。

その思い出は、海の底の奇怪な生物のように彼の意識の中に住みついていて、時々思いがけず浮上するのだった。そしてそのたびに必ず、彼に存在することの苦々しさのような気分をもたらす。

ほかのことは何ひとつ覚えていないのに、という気がする。自分が三歳だった頃のことなんて、まるですべての灯りを消した夜の水族館のようなものだ。いろいろなものがそこにはいるのだろうが、どれひとつとして見ることはできない。

なのに、たったひとつその水槽だけには、小さな、でも確実な灯りがともっている。

こんなつまらないことを、いつまで覚えているのだろうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

永久に、だろうか。

2

そんな人がまだ生きていたのかという気がしたくらいで、感情の動きはほとんどなかった。草薙卓雄にとってその葬儀への参列は、長男であるが故の義務にすぎなかった。

「景浦の叔父さんて人を覚えているだろう。お前にとっては大叔父さんだが」

めっきり弱々しくなった父の声が、受話器を通してきこえた。

「景浦の別宮さんだったかな」

か細い記憶の糸をたどって、草薙はそう答えた。

「そうだ。別宮徳次さんだよ。あの人が亡くなったんだ」

「かなりの歳じゃなかったっけ」

「うん。九十歳だったそうだ」

「景浦で、近くに住んでた人だよな」

小学一年生の頃、その海辺のさびれた町に住んだことは、今となっては夢のようにおぼろな思い出だった。

「うん。あの人にはかなり世話になったんだよ。あの時景浦に住んだのは、徳次さんが仕事を

世話してくれたからなんだ。前の会社がつぶれて困ってた頃だったから、助かった」
景浦小学校というところへ入学して、二年生にあがる時に東京に戻ったわけだから、一年間暮したわけだ、と考える。三十二年も前のことだ。記憶がおぼろなのも無理はないだろう。
「どんな人だったかあんまり覚えていないな。そもそも、どういう関係の人なんだっけ」
「別宮というのはおばあちゃんの旧姓だ。徳次さんはおばあちゃんの弟だよ」
父は自分の母親のことをおばあちゃんと呼んだ。
「そうか。そんなに遠い間柄じゃないんだな」
「うん。そういうわけで、葬式には出たいんだが、おれも足がすっかり駄目でなあ」
去年、脳梗塞の発作を起こしてから、父は足が痛んで長くは歩けないという具合になっていた。
「それは、おれが出るから」
「そうしてくれるか。忙しいだろうにすまんが、いろいろ世話になった人だから誰も行かんというわけにはいかんのだよ」
「わかってる。それは、顔を出すのが当然だろう」
草薙はそれを長男としての役目だと思った。そういう親戚づきあいを自分が果たすことに不満はないのだ。

「ただし、清美は例の調子で寝たり起きたりの状態だから、二人揃っては行けないんだけど」
「それはもう、それで十分だ。清美さんに無理してもらうことはない」
草薙の妻の清美は虚弱な体質で、深刻なものではないが一生つきあっていかねばならない病気を持っていた。
父との間で、清美の病状の話がしばらく続いた。特にどうということはないのだが、要するに普通よりも疲れやすいのだと彼は説明した。長く、うまくつきあっていくしかない病気だから、と。
「だから、おれ一人が景浦へは行くよ。そっちの気持や事情はうまく説明するから」
頼む、ということになった。
それで、草薙は幼い頃一年ほど暮したことのある地を、三十数年ぶりに訪れることになったのだ。
寂しい町だったが、今も変っていないのだろうか、という気持がほんのりとわいた。
だが、実際にそこに来てみると、記憶の中にある家もまばらな場所とは、全く別の町であった。駅前には家が建ち並んで空地など見えず、それどころかスーパー・マーケットまであった。昔は駅から家の隙間に遠く海が見えたような気がするのだが、それもない。
全く見知らぬ土地へ初めて来たのと何も変らなかった。一年生の時のことだからな、と彼は

思った。
葬儀の行われる寺へ、教えられた道順をたどって着いた。自分が昔住んでいたところとは方角がずれていることはわかったが、そこへ迷わず行ける自信はなかった。三十二年も前のことなど、ほとんどなかったも同然なのだ。
懐かしいという感情はなかった。所用を果たすために来た未知の町、という感じだった。
寺に来てみると、馴染みのある親族の顔がいくつもあった。叔父や叔母、十数年ぶりに会ういとこなどもいる。草薙はそれらの人々に手短かに挨拶をし、父がここに来られない事情を説明した。葬儀前のあわただしい時間に、話題はそれで十分だった。
その一方で、草薙の知らない顔もあり、そのほうがはるかに多かった。制服を着ている高校生といった、若い連中になればどんな関係の人間なのか見当もつかない。
ただし、故人の長男だという喪主、最近定年退職をしたという感じの初老の人物には、なんとなく見覚えがあるような気がした。現にその人は、草薙がおくやみの言葉をかけると、少し驚いたように目を輝かせてこう言った。
「ああ、東京の卓ちゃんか。いやあ立派になったなあ。そりゃあ、当然のことなんだけどさ」
その節はお世話になりましたと無難なことを言ってから、草薙は知った顔の集っている一隅に戻り、叔父の一人にあの人は誰でしたっけと小声で尋ねた。

「健一郎さんだよ。村会議員をやったこともあるっていう」
「昔、消防署に勤めてたっていう人でしょうか。なんか、そういう人がいたように記憶しているんですけど」
「いや、ずーっと役場勤めだったと思うがなあ」
そこへ、横からその叔父の姉、つまり叔母が口をはさんだ。
「消防署じゃなくて、村の消防団でなんとかの係をしてたっていう話じゃないの。そこで人望を集めたことがあとで選挙の役に立ったとかきいているもの」
「健一郎さんには妹さんがいませんでしたか」
「お姉さんも妹も沢山いるのよ。もちろん今日来てらっしゃるわよ」
そう言って叔母は祭壇に近いあたりを顎で示した。そっちを見ると、どれが誰と定かではないが、近い身内だという風情で年配の女性が何人かいた。その中には、うっすらと覚えているような顔もあるのだが、かと言って昔がそれ以上よみがえるわけではない。
奇妙な、宙ぶらりんの気分だった。乳白色のベールのむこうに、かつて知っていた世界が広がっているらしいのに、どうしてもそこを透かし見ることはできないという感じだった。
ベールのむこうに、何か嬉しいものがあったんじゃなかったっけ、と草薙はふいに思った。いきなり、自分が心躍る何かにひどく接近しているような気がしたのである。

何かが、あった。
とても懐かしい、心あたたまる何かが。
もうすっかり忘れてしまっている、幸せの記憶。
だが、それが何かは、どうしてもわからなかった。彼は気分のいい夢を見て、しかしその夢の内容がまるで思い出せないのに似た感覚を抱いた。
もどかしい、でもそれなりに完結した気分だった。
葬儀はじりじりと進行し、やがて出棺もとどこおりなくすんだ。参列者は葬儀社のバスで火葬場へつれていかれる。火葬の終了を待つ間に旧知の身内の近況を尋ねあったりする。
草薙はその時間を利用して、喪主の別宮健一郎に、あらためて声をかけた。父が本来ここに参列すべきだと考えていること、足のことがあってそれが不可能なのだが、ぜひともよろしく伝えてほしいと言っていたこと、をちゃんと告げたのだ。
「宗康さん足がそんな具合なの。そりゃあ心配だねえ」
「いや、歩くことに弱くなっただけで、それ以上にどこかが悪いってわけではないんですけどね。まあ、歳ですからだんだん弱くはなっていますが、特に病気で苦しんでるわけでないのが幸いです」
「景浦に住んでた頃は、働きざかりで頼もしい印象だったのにねえ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.